

<牧会ミニ通信>No.19 2020.9.6

牧会者のわたくしに、イエス・キリストが引き合せて下さった忘れがたい方々がおります。

ダンプの運転手かと思間違うほど浅黒い顔の青年が礼拝にお見えになりました。礼拝後の初心者会で示された聖書箇所は、墓場を住み家にしていた悪霊付きの狂人の箇所です。話しが終わると、「狂人の男とはわたしのことです」と言うのです。持参していた書籍は、モルトマンの「希望の神学」。神田 盾夫先生からギリシャ語を学んだともいいます。聞けばT大の哲学科卒という。読むことを勧めたカルバンの「キリスト教綱要」6巻を一か月で読み通したツワモノです。その当時、小学校教師であったY.S.兄は、半年後クリスマス礼拝で受洗しました。

ある時、パーキンソンの母を見舞って欲しいと、彼から依頼されました。確か、冬の日が傾き始めた頃です。玄関から居間に入ると、ほこりが舞い上がるではありませんか。薄暗い奥の居間から杖をついて出てきた御母堂の姿は、映画・地獄の黙示録の一場面を見る思いでした。四肢の動きは緩慢です。明らかに生きる希望を失った冷めた眼差しでわたしを見つめるなり、いきなり「あなた牧師さんでしょう、親切心があるなら、わたしを東横線の妙蓮寺駅の線路に置いてくださらない」、「この病気は神さまでも治せないわ、直せたら信じてあげる」と冷笑しながら鋭い目でわたしを見つめています。驚愕の余り息を呑んだわたしは、祈ることすらも忘れて早々に退散しました。後程、息子のSさんが言いました。「あの牧師さん、祈らないで帰ったのよ、ほんものの牧師よ」と母が言ったというのです。「憐れんたら承知しない」との厳しい身構えがあったようです。数日後、担架に乗せて東京の順天堂にお連れしました。当時、「ドーパミン」は試薬の段階でした。しかし、数時間後手足が動き始めました。「治ったら神さまを信じてもいいと言いましたね」と念を押したわたし、それに素直に応じて、数か月後に洗礼をお受けになりました。事実は小説より奇であります。神の導きとはなんと不思議とロマンに満ちていることでしょう。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次